

『音楽的な感受を基盤とした思考・判断・表現する力を育む』

～音楽を形づくっている要素をもとに、表現領域と鑑賞領域との関連を図った題材構成を通して～

成田 幸代

1 テーマ設定の理由

新学習指導要領において、指導のねらいや手立てを明確にし、生徒が感性を高め、思考・判断し、表現する一連の過程を大切に学習指導を行うことが重視されている。

このことを受けて、音楽科では、音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受し、それをもとに、生徒一人一人が試行錯誤して表現したり、主体的に味わって鑑賞したりする学習の充実を図る。

そのために、個別学習や少人数によるグループ活動などを通して、生徒自らが思考・判断し、表現を工夫したり、聴いた音楽のよさや美しさなどを相手に伝えたりすることのできるような学習を展開する。このことにより、音楽的な感受を基盤として、思考・判断・表現する一連の過程を重視した学習を推進するための指導及び評価の在り方を研究することが本研究のねらいである。

2 「音楽的な感受を基盤とした思考・判断・表現する力」の育成

本研究では、「音楽を形づくっている要素を知覚・感受すること」を学習の中核とし、それを生かした表現や鑑賞の学習を展開する。その際、個人または、小グループによる活動を重視する。表現の学習では、自分なりの表現の在り方をイメージし、試行錯誤しながら音楽を工夫して表現する。また、鑑賞の学習では、自分なりの音楽のとらえ方やイメージ等を大切にしながら音楽を聴いたり、仲間とともに音楽に対する意見交換を行う。こうした学習過程により、「音楽を思考・判断・表現する力」が育つものととらえ、感受の力を高め、『表現領域と鑑賞領域の関連を図った授業づくり』を展開する。そこで身に付けた力をもとに、各題材の中で、表現活動や鑑賞活動において、各生徒が音楽に対する自分の思いやイメージなどを音楽用語などの音楽に関する言葉を用いて表現したり、話し合いができるような活動を展開する。

3 音楽を形づくっている要素の働きと曲想との関連に気付く（認識する）ことの重要性

我々教師が、音楽を志す動機となった要因には様々あるであろう。義務教育時に受けた授業の印象がきっかけとなってもいる。また、幼少よりお稽古ごととして、ピアノなどの演奏活動、そして小中学生時に吹奏楽や合唱等の活動などにかかわった経験にもよるであろう。いずれにしろ、音楽的環境に身を寄せ、ある一定時期において継続的に取り組むことにより、音楽のすばらしさを感受した経験を誰もがもっている。我々が、音楽に感動し、様々な情動が喚起されるのは、こうしたバックボーンの中で“音楽を形づくっている要素の働きと曲想との関連に気付く（認識する）力”が身に付いているからである。この“音楽を形づくっている要素の働きと曲想との関連に気付く（認識する）力”が身に付いていることによって「音楽のすばらしさ」を感じるのである。

「音楽のすばらしさを感じる」とは、音楽をより深くとらえることができることだといえる。例えば、和声的な進行において半終止のあとには、終止感を感じ取れる。また旋律においてもその基調とする終止音への帰属を予感することができる。また、楽曲の全体構想を聴きながら内声や副旋律の存在、そして低音の動きや音色、テンポの変化など、楽曲の中にちりばめられた様々な音楽的要素を感じ取りながら音楽を感じ取り、また表現している。このように「音楽のすばらしさを感じる」ためには“音楽を形づくっている要素の働きと曲想との関連に気付く（認識する）力”が不可欠な要素となる。

4 全体研究との関わり

次の全体研究の具体的な視点①～④とかかわらせて授業実践を行い、検証を行うこととする。

① 生徒につけさせたい力とそれらを育むために生徒にもたせたい問い

全体研究では、教科を学ぶよさや生徒につけさせたい力を明らかにし、「自ら問う力」を育むことを目指している。「自ら問う力」とは、課題に対して解決するためにはどのようにしたらよいか、試行錯誤しながら考える力である。

これをうけて音楽科では、音楽のよさや美しさを理解するために、生徒が思いや意図をもって音楽表現を工夫したり、音楽を味わって聴いたりすることができる力をつけさせたいと考える。この力を身に付けさせるために、「音楽

を形づくっている要素を知覚・感受すること」を学習の中核として、音や音楽に関心を持ち、音楽の仕組みや表現の工夫に気づき、音楽のよさや美しさを感じ取る。そして感じ取ったことをもとにして、思いや意図をもって、表現を工夫したり鑑賞したりするといった学習過程を重視する。この学習過程の中に、生徒に「問い」をもたせながら、主体的に音や音楽にかかわる場面を仕組むことによって、前述した生徒につけさせたい力をさらに高めることができると考える。

② 生徒に問いをもたせる教材のあり方

「音楽を形づくっている要素を知覚・感受すること」が効果的にできるような教材開発を行う。具体的には、音楽を形づくっている要素の働きに着目させるための聴取教材をコンピュータを用いて製作したり、演奏家による演奏を録音あるいは録画し編集したりすることをいう。さらに「目には見えない音や音楽」の仕組みを細かく、深く、わかりやすくとらえさせるために、聴かせ方を工夫したり、聴き取った音や音楽の可視化を図るための手立てを講じたり、といった教材を最大限に生かす方法についても模索する。

③ 生徒に問いをもたせるための教師の役割

生徒が「問い」をもって学習する具体的な学習場面の一例として次のことが挙げられる。歌唱表現の学習において、「この旋律がはずむ感じがするのはなぜだろう？」と音楽に関心を持ち、「付点のリズムを用いていることによってはずむ感じがするのだ」と音楽の仕組みに気づく。そして「付点のリズムを生かして歌うためにはどのようにしたらよいか？」と表現の工夫を考える。さらに、「表現の工夫が聴き手に伝わったろうか？」と表現の工夫について再度考える。このように「問い」をもちながら、感性を働かせながら音や音楽と直接かかわる学習を中学校3年間で積み重ねることによって、音楽のよさや美しさを感じ取ることができるようになるであろう。そのためには、教師が各題材において、指導のねらいを明らかにし、ねらいに即した指導内容や指導計画を整理し、すべての生徒が何を学習したらよいかのかが明確になるようにしなければならない。

④ 生徒の問いをどう見取るか（表現活動・評価）

個別学習や少人数グループ学習を取り入れ、生徒一人ひとりが思考・判断・表現している状況を観察（生徒の発言）や学習シートの記述内容から把握する。具体例として、創作表現の学習において、リズムや音高をどのように組み合わせ、どんなイメージになるように工夫しているかについて楽譜や言葉で表している状況から見取ることが挙げられる。

5 評価規準の作成と評価方法の設定について

平成24年度から新しい観点による学習評価が適用される。新しい学習評価では、表現領域の学習状況を①「学習への関心・意欲・態度」②「音楽表現の創意工夫」③「音楽表現の技能」の3観点で、鑑賞領域の学習状況を①「学習への関心・意欲・態度」④「鑑賞の能力」の2観点で評価する。今年度は移行期において新学習指導要領に基づく指導を行うことから、新しい観点を踏まえた評価を行うこととする。平成22年11月の国立教育政策研究所教育課程研究センターから公表された「評価規準の作成のための参考資料」を参考にして、題材の評価規準を作成し、生徒の『音楽を思考・判断・表現する力』の実現状況を見取る。

また、評価方法については、生徒に音楽を形づくっている要素を知覚・感受させるために、一つの要素に注目させ比較聴取させるなどして、「見えにくい学力」といわれる感受している状況を観察（生徒の発言も含む）や学習シートの記述、発表内容から把握したい。

6 これまでの研究経過（成果と課題について）

平成17年度から平成19年度までの全体研究では、生徒一人一人が、本質的で重要な事柄をきちんと習得することにより、他の事柄においても様々な関連を意識し、自らが試行錯誤しながら「かかわり」を見いだすことをねらいとして研究を行った。その研究の成果と課題をふまえ、平成20年度から平成22年度までの全体研究では、生徒一人一人が見いだした「かかわり」を、生徒自身が振り返り、整理し、発信することができることをねらいとして研究を行った。

音楽科では、「かかわり」とは、音楽を聴く活動を通して、音楽を形づくっている要素を感じ取り、そこで感じ取ったことを表現活動及び鑑賞活動に生かすことだととらえてきた。一つの楽曲は様々な音楽的要素がかかわり合っ

構成されている。それがわかることによって音楽表現や鑑賞に対する意欲が高まると考える。この考えをふまえて、生徒が感受を基盤として「かかわり」を意識し、表現領域と鑑賞領域の関連した題材構成に取り組んできた。そして、音楽科として育む学力を把握するため、その前提となる題材構成の工夫・改善を図り、指導と評価の在り方などについて実践的に研究を進めてきた。

(1) 成果

- ① 「歌唱と鑑賞」、「器楽と鑑賞」、「創作」の題材構成とその評価の在り方について実践検証を行うことができた。
- ② ①のそれぞれの題材において、個別学習や少人数グループ学習を仕組むとともに、学習シートなどの評価方法を工夫することによって、生徒一人一人が、音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じているか、さらに、それらに基づきながら、どのように表現を工夫するかについての学習の実現状況を把握することができた。

(2) 課題

- ① 生徒自らが、主体的に音楽の構造などをとらえ、雰囲気や特質などを感じ取り、試行錯誤しながら表現を工夫したり、音楽のよさや美しさなどを味わって聴いたりすることができるような題材構成や学習指導の展開などについて一層の整理が必要である。
- ② 目標の実現状況を把握するために、ねらい、教材、学習活動の展開などに応じて、適切な評価規準を設定するとともに、観察、学習シート、演奏、批評など評価方法を一層工夫・改善していく必要がある。

7 今年度の具体的な研究内容

(1) 研究対象：第3学年

- 楽曲の聴き取りを行い、音楽を形づくっている要素と曲想とのかかわりを認識できる力を身に付けさせるために適切な教材の開発を行う。
- 音楽の構造を理解し、思いや意図をもって創作したり、鑑賞したりする題材構成について研究する。
- リズムやコードネーム等を理解し、楽譜に関するリテラシーを身に付けさせるための学習の手立てについて研究する。

(2) 成果の検証・方法等

検証にあたっては、授業における生徒たちの話し合いの様子や学習シート等の記述にみられる音楽的語彙などについて抽出し、個々の生徒がどのような変容があったかを、題材ごとに評価を詳細に行えるようにする。また、関心・意欲・態度に関する側面、そして音楽を形づくっている要素の知覚・感受に関する側面、そして技能を含む音楽の表現や鑑賞の能力に関する側面の3つの関連性を見取っていく中で、音楽科として育む学力を明らかにした題材の構造化を研究する。

(3) 期待される成果

- 各題材の学習を通して、音楽を形づくっている要素について知覚・感受したことをもとにして、自分の思いやイメージとかかわらせて工夫して表現したり、味わって聴いたりする力を身に付けることができると考える。
- 小アンサンブルなど少人数グループ学習により、抵抗感の少ない中で、個人で表現できる環境を整えることによって、個人及び全体の音楽を質的に高めることができると考える。
- 楽譜のリテラシーを身に付けることにより、さらに音楽の構造について理解を深めることができると考える。

8 授業実践例（10月22日中等教育研究会より）

第3学年音楽科学習指導案

指導者 山梨大学教育人間科学部附属中学校 成田幸代

1. 指導内容 創作ア 器楽イ [共通事項] 旋律, テクスチャ
(新学習指導要領による)
2. 題材名 2部形式の曲をつくって演奏しよう

3. 題材設定の理由

本題材は、和音進行を手掛かりにしながら2部形式の旋律創作に取り組みさせることとする。

2年生の時に、個別学習において川柳を用いて、川柳の言葉のもつリズムを生かして、4分の4拍子、2～4小節のリズム創作を行い、鍵盤ハーモニカを用いて民謡で使われている音階の3音（ラドレ）を入れて簡単な旋律創作を行った。その際、生徒たちは直接、リズムを手拍子でとったり、楽器で3音を鳴らしたりと試行錯誤しながら自分のイメージ（川柳の言葉の意味や曲が終わる感じなど）にふさわしい旋律をつくり、5線譜に表すことができた。また、ペア学習において鍵盤楽器を用いて旋律に合う伴奏の工夫を行い、主要三和音の働きやリズムの仕組み（長さの異なる音符や休符などの組み合わせによって、音楽の雰囲気が変わること）を理解した。そして3年生では、音階はハ長調、拍子は4分の4拍子、小節数は8小節の旋律創作を行った。はじめに、2小節のリズムをつくらせた後、鍵盤ハーモニカあるいはソプラノリコーダーを用いて、つくったリズムに音高をつけて自分のイメージに合った旋律（動機）をつくらせた。そしてつくった動機を反復、変化させたりしながら、イメージを膨らませながら音楽全体のまとまりを意識して、試行錯誤しながら8小節の旋律をつくることができた。生徒の学習感想には、「最初に動機をつくるのは難しかったが、動機を反復・変化させながら最終的には自分のイメージに合った旋律をつくることができてよかった。」「普段聴いている流行の歌やオーケストラの曲も動機を生かしてつくられていることが分かり、音楽の理解がさらに深まった。」「発表会では、班員それぞれの個性が感じられる曲を聴くことができてよかった。」といった記述が多くみられた。

これらの学習をふまえて、本題材では個別学習において音階はハ長調、拍子は4分の4拍子、小節数は16小節の2部形式（ $a-a'-b-a'$ ）の旋律創作を行い、つくった旋律を演奏できるようにする。はじめに、自分でつくった8小節の旋律（ $a-a'$ ）の旋律を「主人は冷たい土の中に」と同じ和音進行に合うように、作り直す。次に、2部形式の楽曲を用いて、 $a-a'$ から**b**への音楽の雰囲気の変化と**b**から a' への音楽のつながり方を感じ取らせる。感じ取ったことをもとにしながらリズムや音高を工夫しながら**b**の旋律をつくる。和音と旋律とのかかわりによって生み出す特質や雰囲気を感知取り、思いや意図をもって音を音楽へと構成する学習を重視したい。そして、出来上がった $a-a'-b-a'$ の旋律を自分で演奏できるように表現の工夫を行う。

最後に、自分でつくった旋律に伴奏（和音）をつけてグループ内で発表し合い、旋律創作の工夫の意図について伝え合う活動を通して、多様な音楽表現の面白さを感じ取らせたい。

以上が題材設定の理由である。

4. 全体研究との関わりについて

全体研究では、教科を学ぶよさや生徒につけさせたい力を明らかにし、「自ら問う力」を育むことを目指している。「自ら問う力」とは、課題に対して解決するためにはどのようにしたらよいか、試行錯誤しながら考える力である。

これらを受けて音楽科では音楽のよさや美しさを理解するために、生徒が思いや意図をもって音楽表現を工夫したり、音楽を味わって聴いたりすることができる力をつけさせたいと考える。この力をつけさせるために、音楽を聴く活動を通して、音や音楽に関心をもち、旋律の仕組みや表現の工夫に気付くことによって、音楽のよさや美しさを感じ取る。そして感じ取ったことをもとにして、思いや意図をもって、表現を工夫したり鑑賞したりするといった学習過程を重視する。この学習過程の中に、生徒に「問い」をもたせながら、主体的に音や音楽にかかわる場面を仕組むことによって、前述した生徒につけさせたい力をさらに高めることができると考える。

そこで全体研究の具体的な研究の視点A)～D)に沿って次のように本題材を構成した。

A) 生徒につけさせたい力とそれらを育むために生徒にもたせたい問い

本題材で生徒につけさせたい力は、旋律の仕組みによる音楽のよさや面白さを感じ取る力である。その力を育むためには、まず音楽を聴く活動を仕組み、音楽の特徴がどうなっているのか音楽を形づくっている要素に着目させ、要素の働きによって生み出される音楽の表情を感じ取らせたい。次に旋律創作の活動において、リズムと音高をどのように組み合わせたら、自分のイメージに合った旋律になるのだろうか、あるいは仲間がつくった旋律にはいったいどのような工夫がなされているのだろうか、などといったさまざまな角度から「問い」をもちながら、思考・判断する学習過程を重視した。

B) 生徒に問いをもたせる教材のあり方

旋律の仕組みによる音楽のよさや面白さを感じ取らせるために2つの楽曲を参考教材として用いる。参考教材は、

旋律の仕組みに着目させるために、キーボードで聴き取りやすい音色を選んで弾いたものとする。そして、リズムはどんな長さの音符による組み合わせなのか、音高はどんな音を使っているのか、あるいは音のつながり方はどうなっているのか、2つの旋律の仕組みによる音楽の表情や雰囲気にはどのような違いがあるだろうか、などの「問い」をもたせ、旋律の仕組みを細かく、深く、わかりやすく理解させたい。

C) 生徒に問いをもたせるための教師の役割

本題材において生徒一人ひとりが旋律創作に対して自分で道筋を立てることができるようにさせることが必要である。ただし、旋律をつくることだけが目的となるような学習ではなく、音を音楽へと構成していく面白さを感じ取らせるような学習を展開させる。これらのことをふまえて、教師は指導のねらいを明らかにし、ねらいに即した指導内容や指導計画を整理し、すべての生徒が何を学習したらよいのが明確になるようにしなければならない。

D) 生徒の問いをどう見取るか（表現活動・評価）

生徒一人一人が思いや意図をもって、旋律をどのように工夫して、自分のイメージに合うようにつくっているかについて、旋律創作をしている様子を観察し、生徒の発言や学習シートの記述内容などから見取ることができるようにする。

以上のことをふまえ、授業実践を行い、検証を行うこととする。

5. 教材について

(1) 教材

〈創作のための参考教材〉

「主人は冷たい土の中に」 フォスター作曲

「故郷の人々」 フォスター作曲

(2) 教材選択の理由

〈創作のための参考教材〉

「主人は冷たい土の中に」は、旋律と和音とのかかわりに気付かせるために次の3つのパターンを用いる。

(A) a-a´の旋律にIの和音をつけて演奏したもの

(B) a-a´の旋律にI-IV-I-V-I-IV-I-V7-Iの和音進行で演奏したもの

(C) a-a´の旋律にいろいろな和音を付けて演奏したもの

この3つのパターンの曲を聴取させ、同じ旋律でも支える和音によって、音楽の感じが違うことを理解させたい。そして理解したことをもとに旋律と和音とのかかわりを意識して旋律創作の工夫に取り組ませたい。

「故郷の人々」は、「主人は冷たい土の中に」と比較聴取させて、それぞれの旋律の仕組みにおいて共通しているところ(a-a´の和音進行、a-a´からbへの音楽の雰囲気の変化の仕方、bからa´への音楽のつながり方)と違っているところ(bの和音進行、bの最初の音の音高やb全体のリズムなど)に気付かせるために用いる。そして、気付いたことをbの旋律創作の工夫に生かせるようにしたい。

6. 題材の目標

- ・旋律と和音とのかかわりや全体のまとまりに関心を持ち、それらを生かした旋律創作をしたり、器楽表現をしたりする学習に主体的に取り組む。
- ・旋律と和音とのかかわりや全体のまとまりを工夫し、どのように旋律をつくるかについて思いや意図をもつ。
- ・旋律と和音とのかかわりや全体のまとまりを生かした旋律創作をしたり、器楽表現をしたりする技能を身に付けている。

7. 題材の評価規準

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
<p>① 旋律と和音とのかかわりや全体のまとまりに関心をもち、それらを生かして旋律をつくる学習に主体的に取り組もうとしている。 【観察, 学習シート】</p> <p>② 鍵盤楽器の特徴に関心をもち、基礎的な奏法を生かして演奏する学習に主体的に取り組もうとしている。 【観察】</p>	<p>① 旋律と和音とのかかわりや全体のまとまりを工夫し、どのように旋律をつくるかについて思いや意図をもっている。 【観察, 学習シート】</p> <p>② a-a´ からbへの音楽の雰囲気の変化やbからa´への音楽のつながり方を工夫し、bの旋律をどのようにつくるかについて思いや意図をもっている。 【観察, 学習シート】</p>	<p>① 旋律と和音とのかかわりや全体のまとまりを生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付けて旋律をつくっている。 【観察, 学習シート】</p> <p>② 鍵盤楽器の特徴をとらえた音楽表現をするために必要な基礎的な奏法を身に付けて演奏している。 【観察】</p>

8. 指導計画と評価計画について

ねらい	時	学習活動	評価規準と評価方法	☆Aと判断する生徒の状況例 ■Cと判断される状況への働きかけ	備考
a-a´の8小節の旋律を和音進行に合うように工夫してつくる。	1 (本時) ・2 (本時)	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の演奏による「主人は冷たい土の中に」を聴いて、旋律と和音とのかかわりについて理解する。 ・前の題材でつくった8小節の旋律を「主人は冷たい土の中に」と同じ和音進行に合うように直す。 ・楽器でさまざまな音を出しながら、試行錯誤して旋律をなおす。 ・数名の生徒による作品を発表し、工夫しているところなどよかった点について全体で共有する。 ・出来上がった旋律を五線譜に表し、和音進行に合う旋律をつくるために、どんな工夫をしたかについて記入する。 	<p>関①旋律と和音とのかかわりや全体のまとまりに関心をもち、それらを生かして旋律をつくる学習に主体的に取り組もうとしている。</p> <p>【観察, 学習シート】</p> <p>創①旋律と和音とのかかわりや全体のまとまりを工夫し、どのように旋律をつくるかについて思いや意図をもっている。 【観察, 学習シート】</p>	<p>☆8小節の旋律をつくり、学習シートに正確に表している。</p> <p>■まったく考えることができない生徒に対して個別指導を行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習形態 一斉・ハーモニーキーボード&アンプ・鍵盤ハーモニカ・学習シート・拡大楽譜
bの旋律をつくる。	3 4 (本時)	<ul style="list-style-type: none"> ・「主人は冷たい土の中に」と「故郷の人々」のbの部分を聴いて、bの旋律の仕組みや和音進行の違いによる音楽の雰囲気を理解する。 ・a-a´からbへの音 	<p>創②a-a´からbへの音楽の雰囲気の変化やbからa´への音楽のつながり方を工夫し、bの旋律をどのようにつくるかについて思いや意</p>	<p>☆a-a´と音楽の雰囲気を変化させて、よりよい旋律をつくっている。</p> <p>■bの旋律をまったくつくることが</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習形態 一斉・学習キット(音符カード, 音符見え消しシール, ミニホワイトボード) ・鍵盤ハーモニカ ・学習シート

		<p>楽の雰囲気の変化やbからaへへの音楽のつながり方がどのようになっているかについて気付かせ、音楽の雰囲気を感じ取る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・感じ取ったことをもとにし、2つの和音進行の1つ選んで、bの旋律をつくる。 ・数名の生徒の工夫を教師や演奏して、作品のよさや工夫したところについて全体で確認し、互いの旋律創作に生かす。 ・出来上がった旋律を五線譜に表し、どのようなイメージで旋律をつくったかについて意図を記入する。 	<p>図をもっている。 【観察、学習シート】</p>	<p>できない生徒に対して個別指導を行う。</p>	
<p>つくった旋律を互いに発表し、多様な音楽表現の面白さを感じ取る。</p>	5	<ul style="list-style-type: none"> ・16小節全体を通して、自分のイメージに合った旋律になっているかどうか見直す。 ・出来上がった旋律を楽器で演奏できるように練習する。 ・グループ（生活班）内で、出来上がった旋律を楽器で演奏して発表し合う。 ・互いにつくった旋律に関する感想を学習シートに記述する。これまでの学習を振り返って感想を記述する。 	<p>関②鍵盤楽器の特徴に関心を持ち、基礎的な奏法を生かして演奏する学習に主体的に取り組もうとしている。【観察】技①旋律と和音とのかかわりや全体のまとまりを生かした旋律をつくる技能を身に付けている。 【観察、学習シート】技②鍵盤楽器の特徴をとらえた音楽表現をするために必要な基礎的な奏法を身に付けて演奏している。 【観察】</p>	<p>☆正しく記譜ができており、作品と工夫の意図が一致している。</p> <p>■記譜ができていない、あるいは工夫の意図をまったく書いていない生徒を指導する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習形態 グループ ・ソプラノリコーダーあるいは鍵盤ハーモニカ・学習シート

9. 本時の授業について (第3時)

(1) 日時 平成23年10月22日 (土) 10:20~11:10

(2) 場所 山梨大学教育人間科学部附属中学校 第1音楽室

(3) 本時の目標 「bの旋律をつくろう」

(4) 展開 *教師の指導 ◇学習活動

過程 (時間配分)	学習のねらい	学習活動及び教師の指導	評価・備考
課題の把握 (2分)	1. 本時の学習課題を知る。「bの旋律をつくろう」	本時は、曲を聴いて気付いたことを旋律創作に生かし、よりよい旋律にするための学習であることを告げる。	
課題の追求 (45分)	2. 2つの2部形式の曲を聴いたり、さぐり弾きをしたりして、bの旋律の仕組みを理解する。 ・和音進行によって旋律の雰囲気を変化することを感じ取る。 ・a-a´からbへ、bからa´への音のつなげ方などを工夫することによって旋律の雰囲気を変化することを感じ取る。 3. 2つの曲で聴き取ったことや感じ取ったことをもとにし、2つの和音進行の中から1つ選んで、bの旋律をつくる。 数名の仲間の工夫を教師が演奏して、参考にできるところを取り入れるようにする。 4. 出来上がった旋律を五線譜に表し、どのようなイメージで旋律をつかったかについて意図を記入する。 5. 数名の生徒の工夫を教師や演奏して、作品のよさや工夫したところについて全体で確認し、共有する。	*「主人は冷たい土の中に」と「故郷の人々」を教師がキーボードで弾き、b旋律の工夫に気付かせる。 ◇聴き取ったことを挙手して発言する。(または、教師の指名によって発言する。 ◇鍵盤ハーモニカで直接音を出したりして試しながら、旋律をつくる。学習シートにつくった旋律を記譜し、工夫の意図について記述する。 *2つの曲で聴き取ったことや感じ取ったことを生かして、試行錯誤できるようにする。 *巡視しながら、生徒たちの工夫を取り上げ、全体に広げて、互いの旋律創作に生かす。 ◇音高やリズムをどのように工夫してつくったのかについて学習シートに記述する。 *巡視しながら、工夫の意図を記述することができているかどうか確認する。 ◇数名の生徒の工夫について仲間に感想を促したり、認めたりし、全体に広げる。 *互いの工夫を認め、共有する。	・学習形態 一斉 ・鍵盤ハーモニカ創 ②a-a´からbへの音楽の雰囲気の変化やbからa´への音楽のつながり方を工夫し、bの旋律をどのように作るかについて思いや意図をもっている。 【観察, 学習シート】
まとめ (3分)	6. 次回の学習について知る。	*次回も、この学習の続きを行うことを告げる。	

9 今年度の成果と課題

- 楽曲の聴き取りを行い、音楽を形づくっている要素と曲想とのかかわりを認識できる力を身に付けさせるために適切な教材の開発を行う。

これまで音楽を聴く活動を通して、音楽を形づくっている要素を知覚し、要素の働きによって生み出される音楽の雰囲気を感受させるといった学習を重視すると共に、楽譜の活用も重視してきた。中等教育研究会での公開授業では、創作のための参考教材の楽譜をパワーポイントを使って生徒に提示した。生徒一人一人が旋律の仕組み(旋律の流れ(旋律線)、音高、リズム(反復)、和音進行)に対して興味・関心をもって気付くことができるように、アニメーシ

ョン機能と発問を工夫した。このことによって、自分のイメージに合った旋律創作の工夫をする上での手掛かりをつかむことができたと思う。

将来、電子黒板が導入されることを見据えて、IT機器を積極的に活用していくことを考えると共に今後も生徒たちが音楽を認識できる力を身に付けることができるような適切な教材の開発に励んでいきたいと考える。

- 音楽の構造を理解し、思いや意図をもって創作したり、鑑賞したりする題材構成について研究する。

今年度は、1，2年生での表現領域及び鑑賞領域での学習で身に付けた音楽的な力を総合的に働かせて、2部形式の旋律創作に取り組みさせた。昨年度の研究の反省を生かして、限られた授業時数の中で、生徒一人一人が興味・関心をもって、試行錯誤しながら自分の思いや意図をもって旋律創作の工夫ができるように学習内容を絞りこんだ。この題材を終えた後、生徒に学習感想を書かせた。主な内容は次の通りである。

- bの旋律づくりはとて難しかったです。aの旋律とは大きく変化させなければならず、しかも和音に合うように音を選ばなければならなかったからです。音楽は1つのことをやりながら、もう一つ別のルールも守らなければならないので、本当に難しいと思いました。
- 旋律の流れを線で表すことでその曲の雰囲気をつかみやすくなることがわかった。今回の作曲では、1，2段目の線の形と3段目の線の形が対照的になるように努力した。そのこともあって、3段目の雰囲気を変えることができた。
- bではaと対照的につくることを授業で学んで、自分でやってみると曲の構成がとてもうまくできて、自分が普段聴く曲のようにbで曲の雰囲気を変えることができてすごいなあと思った。自分でつくってみることで曲がどのような構成でつくられているのかについて学ぶことができてとても楽しかった。
- この学習でリズムの反復など音楽の構成について理解することができた。このことは曲を鑑賞するうえでも大切になってくるので、学習したことを活かしたい。

これらの学習感想から、生徒たちにとって、音楽の構造を理解し、思いや意図をもって創作したり、鑑賞したりすることができるような題材となっていたといえるかもしれない。しかし、授業の実際場面では、旋律線にとらわれすぎて、和音進行に沿ってつくることを落としている生徒が多く見受けられた。それは、教師が和音進行による音楽の雰囲気を生徒たちに感じ取らせる場面をきちんとつくらなかったことが原因であった。このことから改めて題材構成を行う上で、指導のねらいとそのねらいを達成させるための手立てをもっと練らなければならないと考える。

- リズムやコードネーム等を理解し、楽譜に関するリテラシーを身に付けさせるための学習の手立てについて研究する。

楽譜を活用することによって、音楽の構造や音楽を形づくっている要素についてより深く、細かくみることができるようになり、それはやがて音楽のよさや美しさを感じたり、味わったりすることにつながっていくと考えている。2年生の時の旋律創作では記譜する力（リズム譜・5線譜の読み書き）を身に付けた。また、同じく2年生で鍵盤楽器による伴奏の工夫をする学習で和音（主要3和音の和音記号の読み方、構成音、旋律と和音進行とのかかわり）について学習した。これらの学習を基盤にして、2部形式の旋律創作の学習でリズム創作、和音進行に沿った旋律創作をする学習を段階的に仕組み、取り組ませた。しかし、国語・社会・数学・理科・英語などの週に3，4時間行われている教科に比べて、週に1回、時には0（ゼロ）の週もある音楽科の授業では、既習事項を振り返らせるための時間が多くかかってしまった。そこで、小学校での学習経験に基づきながら、楽譜に関するリテラシー（音符の種類、音高、リズム、和音、音階、強弱記号、速度記号、曲想に関する用語などが理解したり、書いたりすることができる力）をどこまで指導したらよいかさらに整理する必要がある。

〈引用文献〉

- ・中学校学習指導要領解説音楽編 文部科学省
- ・「これからの音楽教育 音楽教育における学力をどうとらえるか」大熊 信彦著
(中等教育資料平成22年4月号～平成23年6月号)

〈参考文献〉

- ・中学校音楽科の授業と学力育成－生成の原理による授業デザイナー 西園 芳信 監修 暁教育図書（2009年）